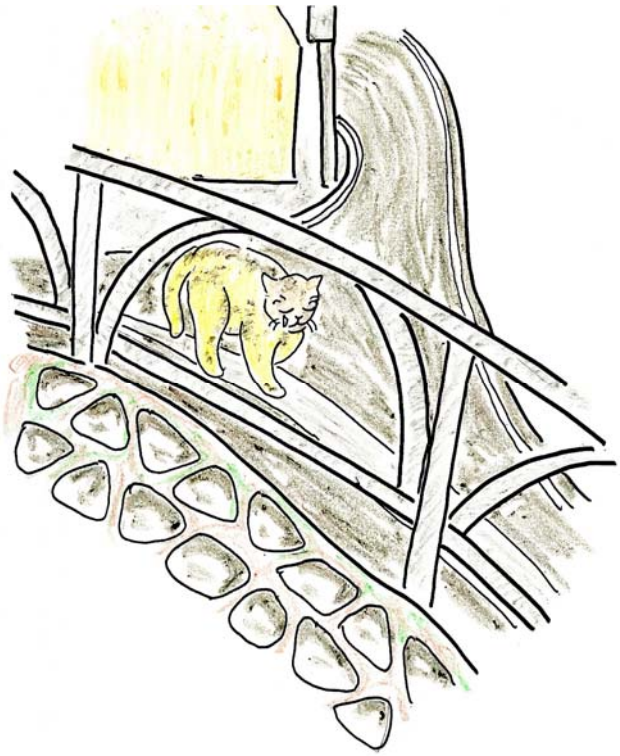
支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.3

吾輩は猫である。名前は「ミー（MI)」。市民家に飼われるようににゃって彼是（かれこれ）7年が経っておるにゃ。生まれて間もない頃、親からはぐれ、蛤坂（はまぐりざか）（野町1丁目地内大橋詰）あたりでミャーミャーと鳴いていたところをご主人様に拾われ、猫好きの奥様の為にと市民家で飼われることになったんだにゃ。「ご助」と「支援」はそのころからの友達にゃんだ。

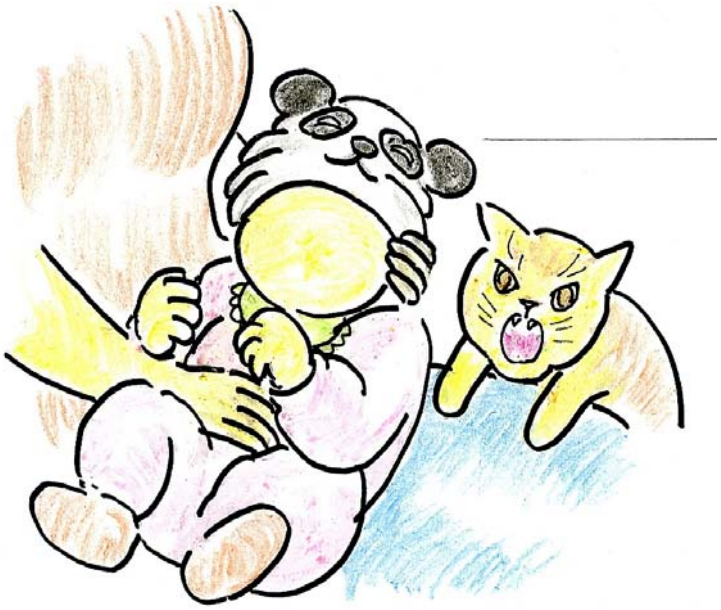


ご主人様も奥様も「ミーちゃん、ミーちゃん。」と大切にしてくれて、吾輩は凄く幸せだったんにゃけど、ご主人様も奥様もご助達には興味にゃいのか、ちっとも話しかけにゃいし、いつも無視するからかわいそうだにゃあと、「にゃにゃん、に、にゃああん（ご助に支援）にに、にゃあん（にも、ご飯）」といつも訴えていたのにゃあ・・・

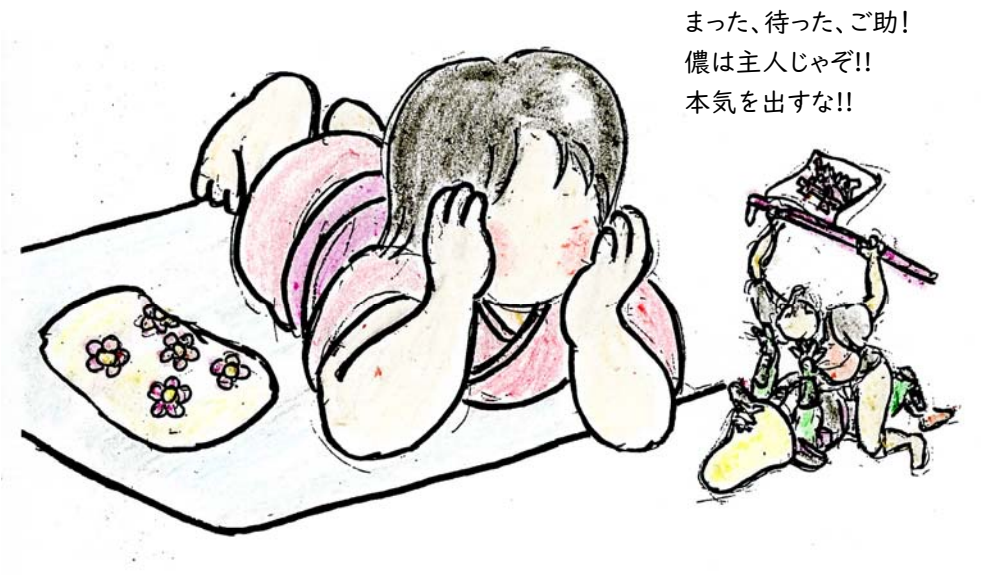
そうこうしているうちに、援がうまれたんにゃ。

つまりだにゃあ、吾輩は援の姉さまにあたる姫猫様にゃんにゃ。

面白くにゃいのは、援が生まれてからはご主人様も奥様も吾輩のことを構ってくれにゃくにゃったことにゃの。それでも家にはご助と支援がいたから寂しくはにゃかったわ。



それが５年ほど前の桃の節句あたりだったにゃけど、寝室でご助と支援が組打の訓練をしていたんにゃ。知ってるにゃ？ご助の方が支援よりも強いにゃ。いつもと同じようにご助が旗指物を奪って支援に乗っかているから、そろそろ吾輩が仲裁をと立ち上がった・・いえ、四つ足立ったとき、昼寝から起きた援が「にゃにしてるの？」と喋ったんにゃ。



にぇん（援）！それ、姉さまの日課にゃのよ。いつもの「にゃにゃん、にゃにゃにゃにゃん（ご助、そこまで）」と話しているのに・・吾輩の仲裁と違っているものにゃから、驚いたご助が旗指物を落として、支援が逆転勝ちしてしまったにゃん。

「姫様にはわれらが姿お見えでござるか？」と支援が話しかけてからは、援は毎日のように「ちえん（支援)、ぼすけ（ご助）はどこじゃ」とご助たちと遊びたがってにゃ、おかげで吾輩がご助達と遊ぶ時間が少なくなったんだにゃ。

援のおかげで初めてご助に勝ち、気を良くした支援は「姫様、姫様。」と援にべったり。その点、ご助は援から「ぼすけ、ぼすけ。」と呼ばれ援のことを快く思っていなかったと思うにゃ。吾輩と相通じるものを感じたからにゃ。

ご助も援と遊んだり支援との火災予防活動に嫌気が差していたようで、直ぐに吾輩とは仲良くなったにゃ。ご助の為に神棚のお神酒（みき）を何度取ってきてあげたかことか。３年ほど前から援が点徳幼稚園に通うようになって、やっと吾輩はご助とゆっくりできるようになったんだにゃあ。

一昨年の冬だったかにゃ、朝からお神酒を飲み、動けなくなったご助を番小屋にのこし、支援は煙にまかれない避難方法といって防火訓練をしていたにゃ。

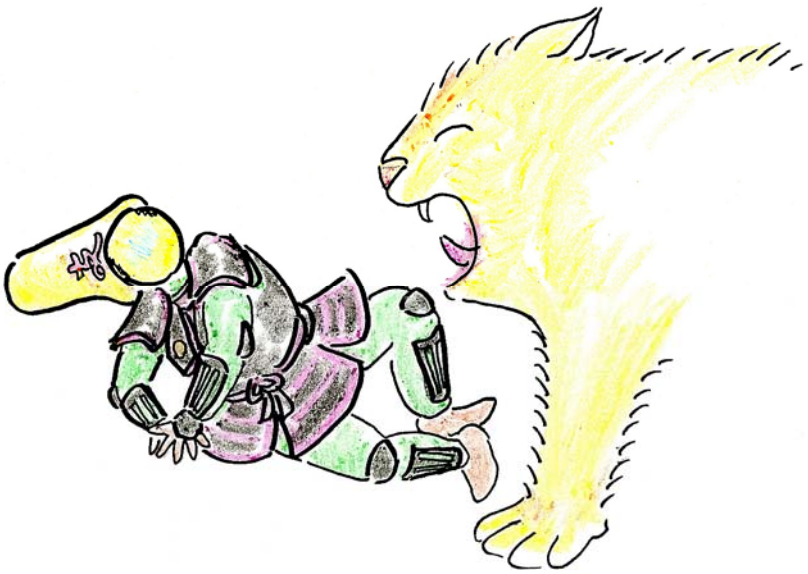
吾輩が遅い朝食を摂っているところへ「避難マニュアルの②　火災の煙から身を守る。煙にまかれないために・・」といいにゃがら匍匐(ほふく)前進しながらやってくると「おや猫殿、食事中でござるか。失礼いたした。」と方向を変え、訓練を続けていたにゃ。

その日の夜、居間の電気ストーブのブゥゥンという音が長い時間続いていたかと思うと、「臭物（くせもの：主様の言葉で意味不明。）」とご主人様の叫び声が家中に響き、続いて真っ黒な煙が廊下から援の寝室へと流れ込んできたんだにゃ。

ご主人と奥様は「蛸足はするな。」「私じゃない。」と言い争い、支援は何故か知らぬ顔、ご助は・・お神酒を抱えて眠ったまま。吾輩が援の寝室に入ると「ごほっ、ごほっ」と援が咳き込んでいたにゃ。

「にぇん（援）」と吾輩が援の額に前足を置くと目覚めた援は「にゃに？煙？怖い？ママッ？」と立ち上がろうとしたにゃ。昼間支援が言っていたにゃ。黒い煙は有毒な一酸化炭素。吸い込んだら命が危険。体を低くして・・吾輩は立ち上がろうとする援の上に乗ると「にぇん、にゃっにゃにゃみぃ（えん、立っち

ゃダメ)」と制止すると援の頬を必死に舐め落ち着かせたんだにゃ。真っ暗な中、援は吾輩のいうことが分かったらしく「ミー、立っちちたらダメにゃのね」と。「にゃあ（そう)」と伝え、吾輩は尻尾を援の右手に巻き付けたにゃ。吾輩の尻尾をしっかりと握りながら援は這うようにして寝室から避難したんだにゃ。

「援！援は！大丈夫なの？」しばらくして、奥様とご主人様が駆けつけ、廊下に出ていた援を抱きしめながら喜んでいたにゃ。吾輩も大丈夫？といわれたかったけど、おねぇちゃんだから我慢。

「いい子、いい子」と自分で自分の頭を撫でていると、いつの間にか現れた支援が「ミー殿。拙者が教え役に立ちもうしたな。」としたり顔（意：得意そうな顔）で言うもんだからつい「シャーッ」と言ってしまったのにゃ。おねぇちゃんの道はまだまだ遠いようだにゃあ。（つづく）